漱石と「坂越の男」

高田瑞穂

漱石が、ことに晩年の漱石が、短冊を書けの、詩を書けのという未知の人々の依頼に苦しめられたということは、この国の習俗に徴して、言わばまぬがれ難き所であつたと思う。漱石もまた一応はその点を了解して、切角の希望を無にしないよう努力して筆を執つたのであつた。しかし、そういう殊勝な心懸けも、引きも切らぬ注文の山の前に、とうてい永続し得るはずがなかつた。漱石は次第に、他人の依頼を無にするも止むなしという結論に到達していつた。しかし、依頼者の側にも往々にして手強い人があつて、自分の希望を達するまでは容易なことでは引き下らなかつた。そういう手強い相手の中で、出色の人物が、坂越の男であつた。「硝子戸の中」第十二章および第十三章はこの坂越の男の記述である。

「其のうちで一番私を不愉快にしたのは播州坂越にゐる岩崎といふ人であつた。」にはじまる漱石の述懐によると、此の人は端書による注文で、漱石の俳句を手に入れることに既に何度となく成功した。それがある時、四角な薄い小包を送つて来た。漱石はそれを仕舞い失くしてしまう。これが問題の端緒であつた。この小包と前後して、名古屋から茶の罐が届けられた。漱石は、誰が何のために送つたものか全然分らぬままに、その茶を飲んでしまつた。すると程なく、坂越の例の男から、富士登山の絵を返してくれと云つて来た。そんなものを貰つた覚えがないのでうつちやつておくと、富士登山の絵を返せ返せという催促が三度も四度も続いて送られてきた。ついに漱石は、この男を「大方気違だらう」と考えてその後一切取合わないことにした。明治四十五年の春のことと推定される。

ところが、「たしか夏の初の頃と記憶してゐるが」と漱石は言う。坂越の男のよこした例の小包が、漱石山房の書斎の

中から発見される。驚いて封を解いて中を検べると、小さく畳んだ絵が一枚、正しく富士登山の絵が出て来たのである。絵のほかに手紙も一通添えられてあり、絵に賛をしてくれという依頼と、御礼に茶を送るという文句が書いてあつた。

「私は愈々驚いた。然し其時の私は到底富士登山の図などに賛をする勇気を有つてゐなかつた。私の気分が、そんな事とは遙か懸け離れた所にあつたので、其画に調和するやうな俳句を考へてゐる暇がなかつたのである。けれども私は恐縮した。私は丁寧な手紙を書いて、自分の怠慢を謝した。それから茶の御礼を云つた。最後に富士登山の図を小包にして返した。」

「硝子戸の中」の記述のままに、この出来事を「夏の初」のこととすると、漱石は「彼岸過迄」を四月に書き上げて、しばらくの閑暇を楽しんでいた頃と思われる。しかしこれは漱石の記憶ちがいのようである。次に掲げるのは、坂越の男に送つた、漱石の詫び状である。書簡集にもれているのでその全文を引くが、これは十二月三十日に書かれている。消し印によつて、大正元年の十二月三十日であることが、難うじて知られる。そうすると、漱石が「行人」の連載を始めたばかりの頃の手紙である。その心血を「行人」に傾けていた漱石が、富士登山図の賛のために句を按ずる気になれなかつたのも当然である。

拝啓　此間中より富士登山の畫につき度々御申聞相成候處一向覚無之故其儘に致し置候處右小包今日に至り発見致しはからず絹地の畫を拝見致し候是右着の折多忙にてそれなりになりたる後忘れて今日に至り候も何とも無申訳候早速小包にて御返し候間御落掌被下度候名古屋より参り候茶も右小包中の貴翰に御通知ありしを開封せざりしため今日御礼も差出さざる次第是亦あしからず御容赦願上候　早々

十二月三十日　夏目金之助

岩崎太郎様

封筒の表書きには「播州坂越　岩崎太郎様」とある。まことに平明な、自然な詫び状である。「硝子戸の中」で、坂越の男の小包を発見して、「驚いた」「私は又喫驚した」「私は愈驚いた」と、三度び驚いた漱石は、その驚きのさめやらぬ間に、早速筆を走らせたと思われる。そして、事実をそのままにのべて、「無申訳候」「あしからず御容赦願上候」と素直にあやまつたのである。このような出来事で三度驚いたと記していることは漱石の道義的感覚の瑞々しさをよく物語つている。それだけにまた、自らの非を認め、素直に詫びることによつて、漱石は一種の解放感を得たのだつたにちがいない。「私は是れで一段落付いたものと思つて、例の坂越の

男の事を、それぎり念頭に置かなかつた」漱石であつた。しかし坂越の男は断じて漱石を許さなかつたのである。「硝子戸の中」第十三章は、そういう坂越の男の面目を如実に伝えている。

漱石が詫び状を出してからしばらくたつたある日、坂越の男は短冊を封じて漱石に送り、「今度は義士に関係のある句を書いてくれ」と言つてくる。先に「富士登山図」の賛を求め、今度は「義士に関する句」を求める。この男の心中に一個の倫理が在つたことが想像されるような気がする。居間の壁間には皇族の写真をかかげ、早朝に起き出でて東天に向つて日輪を拝する——そんな、物堅い田舎の人が浮んでくる。そういう倫理に、一種の共鳴とまでは言えないまでも、少くとも不快でないものを感じたからこそ、漱石は当初において坂越の男に何枚かの短冊を、「其の都度向ふのいふ通り書いて送つた」のだつたのかも知れない。しかし、「富士登山図賛」や「義士に関係のある句」で攻められ続けては、漱石の閉口するのも決して無理ではない。しかも、何故そういう賛や句は困るかを説明するとなると、これは容易ならぬ手数を覚悟してなくはならぬし、たとえどんな風に説いても、恐らく問題は坂越の男の理解を絶した世界に走らざるを得ないであろう。親友子規が、自己の存在を賭して戦つた文学上の革新にも連らなる問題がそこには横たわつていたはずである。漱石は止むを得ず、「つい其儘」にしてしまつたのである。

坂越の男の「拝啓失敬申し候へども」という判でおしたような書き出しの端書が、一週に一遍ないし二週に一遍の割で届きはじめたのはこの時からであつた。催促は執拗を極めた。漱石は次第に不愉快になつていつた。同時に坂越の男の催促も、いつか「変な特色」を帯びるようになつた。最初のきざしは「茶を遣つたではないか」ということばであつた。ついで「茶を返さないならそれでも好いから、金一円を其代価として送つて寄こせ」と言う。漱石自身のことばを引こう。

「私の感情は此男に対して次第に荒んで来た。仕舞にはとう〳〵自分を忘れるやうになつた。茶は飲んでしまつた、短冊は失くして仕舞つた、以来端書を寄こす事は一切無用であると書いて遣つた。」

漱石はとうとう癇癪を起したのである。私見によれば晩年の漱石は、多少神格化されている傾きがある。例の則天去私の呪文が、効き過ぎというに近い現象を呼びおこしているのではないかとも思う。漱石は坂越の男に癇癪を爆発させた。しかし、それは、前の詫び状の場合のように、漱石の道義感を満足させ得なかつたことも当然であつた。漱石は情ない気持に落ちて行かなくてはならなかつた。

「さうして心のうちで、非常に苦々しい気分を経験した。こんな非紳士的な挨拶をしなければならない様な穴へ、私を追ひ込んだのは、此の坂越の男であると思つたからである。こんな男の為めに、品格にもせよ人格にもせよ、幾分の堕落

を忍ばなければならないのかと考へると情なかつたからである。」

これも亦、怒りである。「こんな男の為めに」と書きつけることによつて、漱石の気持が救われる訳はもともとあり得なかつた。ここにわれわれは、「道草」の健三の声を聞かないであろうか。

「執拗だ」（六十五章）

「神でない以上辛抱だつてし切れない」（九十六章）

「己の所為ぢやない。己の所為ぢやない」（九十七章）

漱石がどんなに激しい怒りを爆発させても、坂越の男は平気であつた。彼は「道草」の島田老人の如く、健三の妻君の如く、全く平気であつた。

「茶は飲んでしまひ、短冊は失くしてしまふとは、余りと申せば……」という端書、そしてその冒頭には依然として「拝啓失敬申し候へども」という文句の置かれた端書が、くりかえしくりかえし送り届けられた。時には、もう一度書いてくれれば「またお茶を送つてやるが何うだ」と言い、「事苟しくも義士に関するのだから、句を作つても好いだらう」とも言つてきた。坂越の男は、自己の主張の正しさを自ら信じて疑わなかつたのである。そして漱石は腹を立て、癇癪を起しつつ、次第に自分だけの世界へ、孤独な境界へと堕ちなくてはならなかつた。人間観の根本的な差異、人間生活の奥の奥で統べる考え方のくいちがい、それはもう漱石にとつてどうしようもないものであつた。しかし、だからと言つて、どのような正当な理由があるにしろ、人間として、孤独な、隔絶された狭い世界にとじ込められることは、決して漱石にとつて望ましいことではなかつた。どのような人間も、孤独の境界を本来好むようには、造られていないのである。坂越の男の催促がしばらく途切れて、年が改まつた。大正三年の正月である。坂越の男は「普通の年始状」を漱石に送つた。「それが私を一寸感心させた」と漱石は言う。そして、漱石は短冊に句を書いて送る気になつたのである。そこに私は、孤独であることに満足し得ない漱石を見る。これで双方満足して終ることが出来たとしたら、恐らく坂越の男は、「硝子戸の中」の二つの章に描出されることもなかつたであろう。彼はその贈物に満足しなかつた。推察を出でぬが、詩を詩として見ることを知らぬ坂越の男にとつて、漱石の句は物足らぬものだつたにちがいない。彼は短冊が折れたとか、汚れたとか云つて、しきりに書き直しを請求して已まない。この請求も随分根気よく続いたようである。第十三章は、次のことばで終つている。そしてそれの書かれたのは、大正四年のことである。

「現に今年の正月にも、『失敬申し候へども……』といふ依頼状が七八日頃に届いた。私がこんな人に出会つたのは生れて始めてである。」

坂越の男の話はこれでおしまいである。尻切れとんぼである。だから色々なことが考えられてくる。今その一つを採ると、漱石にとつて「こんな人に出会つたのは生れて始めてである」というのは本当であろうかという問題が在る。坂越の男を、揮毫を求める未知の人という限られた類型の中においてだけ考えれば、それはその通りであつたであろう。これほど執拗で、これほど訳の分らない人間は、漱石ファンの中には二人となかつたかもしれない。だが、坂越の男を、仮りに人間一般の場において眺めるとしたらどうか。坂越の男とその本質において異るところのない人間は、決して漱石の周囲に珍しい存在ではなかつたはずである。このことは漱石の全作品に徴して明瞭であると言つていい。漱石の癇癪・人間嫌い・厭世は、常に漱石文学の母胎であつた。そして、それにもかかわらず漱石は、ついにニヒリストではあり得なかつた。漱石の立脚地は、ペシミズムではなく厭世観であつた。ペシミズムの文字通りの意味を最悪観とすれば、厭世観にはどこかに、この世の外に逃れて、そこに救いを求める要求が仂いていると思う。厭世は遁世とひとつづきになることによつて、ペシミズム克服の一途を既にその中に含んでいると言つていいのではないか。そうでなければ漱石晩年の諸作、殊に「硝子戸の中」に続く「道草」は、書かれ得なかつたのではないか。「道草」において、漱石の分身健三をとりまく人間群像は、いずれも坂越の人と血縁関係にある。そして「道草」は、そういう人々に対する健三の絶望的な怒りが、次第に、諦めに近い一つの平静に帰してゆく物語であつた。諦めに近いけれど、それは単なる諦めではない。

「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起つた事は何時迄も続くのさ。」

「道草」結末における健三のことばである。それは寂しい苦々しい口調でつぶやかれていた。しかし、その寂しさや苦々しさは、人間と人間生活に対する認識の、漱石における最後の、そして最高の閃光の反映でもあつたのだと思う。作家がそこから出発し、そこへ帰つてゆく根柢としての現実主義をここに見ることが可能ではないであろうか。それは、厭世の果てについに再び現実世界に立還らざるを得ない、作家の宿命だと言つていいと思う。

追記

二、「満韓ところどころ」は、余りに漱石の私が強く出すぎたため、発表当時「漱石ところどころ」だと評されたという。その評言を借りて、漱石に関する小見を、おりおり記すことにしたいと考えている。この一文を「漱石ところどころ」の第一章とする。